2つのJ
～内村鑑三～

シリーズ・日本人と聖書
第9回

生い立ちから回心まで

- 1861年、高崎藩士の長男として江戸に誕生
- 1877年、札幌農学校の第二期生となる
- 翌年、「イエスを信ずる者の契約」に署名・受洗
- 1881年、札幌農学校卒業、北海道開拓使勤務
  - 翌年、勤務のかたわら「札幌基督教会」設立
- 1884年、米国に私費留学。幻滅・失望
- 1885年、アマスト大入学。シーリー総長と出会う
- 1886年3月、回心する（本当のクリスチャンになる）

回心の日の日記

- 「わが生涯に大きな意味を持つ日。キリストの罪の赦しの力が今日ほどはっきりと示されたことはなかった。今日までわがこころを悩ませていたあらゆる疑問の解決は、神の子が十字架につけられたことの中にある。」

帰国後の活動

- 1889年、帰国。複数の学校で教鞭を執る
- 1891年、第一高等中学校在職中、教育勅語に最敬礼を拒み（不敬事件）、退職
- 教師をしながら執筆活動開始
  - 『基督信徒のなぐさめ』、『求安録』、『余は如何にして基督信徒となりし乎』
- 1901年、「理想団」の一員として足尾鉱毒事件に関わる
- 1903年、日露戦争に反対。「非戦論」を唱える

＜不敬事件＞

- 今を去ること十余年前、余はそのころ発布された教育勅語に向かって低頭しないとて、ひどく余の国人より責められた者である。その時の、余と余の国人との争点は下のごときものであった。すなわち余は、勅語はおこのうべきものであって拝むべきものではないと言いしに、文学博士井上哲次郎氏をもって代表されし日本人の大多数は、これを拝せざる者は国賊である、不敬漢であると言いて、余の言うところには少しも耳を傾けなかった。（1903年8月『万朝報』）

＜日本国とキリスト＞

- 日本国はキリストを要す。彼によるにあらざれば、その家庭を潔むるあたわず。日本国はキリストを要す。彼によらずして、その愛国心は高尚なるあたわず。キリストによりてのみ、真正の自由と独立とあり。そは彼は霊魂に自由を与うる者なればなり。キリストによらずして、大美術と大文学とあるなし。そは彼は人類の理想なればなり。キリスト降世二千年後の今日、吾人は彼によらざる真正の文明なるものを思惟するあたわず。（1901年5月『聖書之研究』）

＜非戦論＞

- 余は日露非開戦論者であるばかりではない、戦争絶対的廃止論者である。戦争は人を殺すことである。そうして人を殺すことは大罪悪である。そうして大罪悪を犯して、個人も国家も永久に利益を収め得ようはずはない。
- もし世に大愚の極と称すべきものがあれば、それは、剣を持って国運の進歩を計らんとすることである。

無教会主義

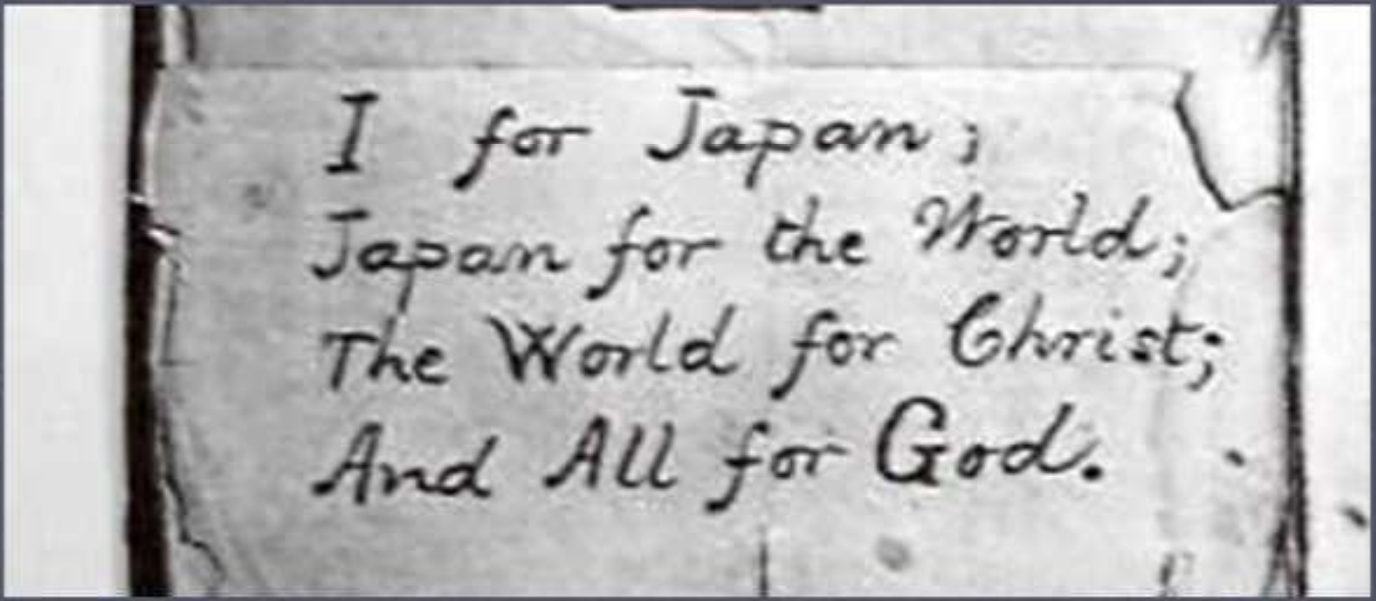
- 教会の弊害にうんざりしていた内村
  - 宣教師との関係
  - キリスト教国アメリカの現実
- 1900年、『聖書之研究』を創刊（～1930年）
  - 在野の預言者として文筆活動を続ける
- 「無教会主義」をつらぬく
  - 会堂・牧師・教理などを持たず、聖書を学ぶのみ
  - 聖書講義や講演会を精力的に開催

＜新教会＞

- 監督なし。牧師なし。伝道師なし。憲法なし。洗礼なし。聖餐式なし。按手礼なし。楽器と教壇とを備えたる教会なし。神あり。キリストあり。聖霊あり。神と人とを愛する心あり。その教会堂は、上に蒼穹を張り、下に青草を布(し)きたる天然なり。その礼拝式は日々の労働なり。その音楽は、聖霊に感じたる時の感謝の祈祷なり。その憲法は聖書なり。その監督はキリストなり。しかしてその会員は、霊と真(まこと)とをもって神を拝する世界万国の兄弟姉妹なり。われらはとこしえに、この教会に忠実なる会員たらんと欲す。(1906年4月『聖書之研究』)

2つのJ

I for Japan;	我は日本のため
Japan for the World;	日本は世界のため
The World for Christ;	世界はキリストのため
And All for God	万物は神のため



「私は二つのJを愛する。第三のものはない。一つはイエス（Jesus）、もう一つは日本（Japan）である。私は自分がイエスと日本のいずれをより愛するのか、自分でも知らない。

ああイエスよ。汝はわが魂の太陽であり、愛する救い主である。私は汝にすべてをささげる。

ああ日本よ。国々の中の国よ。汝のために、我らはその心と祈りと犠牲をささげよう。」

Ⅰコリント 2章2節

- 「そはわれ、イエス・キリストと彼の十字架につけられし事のほか、何をも知るまじと心を定めたればなり」＜文語訳＞
- 「なぜなら、わたしはあなたがたの間で、イエス・キリスト、それも十字架につけられたキリスト以外、何も知るまいと心に決めていたからです。」＜新共同訳＞